

## 江戸時代の経済思想における市場原理の概念についての一考察

ヤン・シーコラ

1

江戸時代は、ヨーロッパで経済学が独立した学問として登場してきた思想的な激動期に対応している。二世紀半にわたる鎖国政策にも拘わらず、西洋の科学思想が部分的に日本の学者にも伝わって、普及してはいたが、西洋の哲学思想や政治思想、経済思想などが日本に導入されるのは、多かれ少なかれ制限されていた。一方、文化的に孤立した環境のもとで日本の経済・社会がますます複雑になり、貨幣経済が進展していくにつれて、T・マン(Thomas Mun)からF・ケネー(François Quesnay)、A・スミス(Adam Smith)にいたるヨーロッパの経済思想家が考察を深めていったのとよく似た経済現象が形成されていた。<sup>(1)</sup>このような経済現象の中で顕著なのは、商業の拡大や物価の変動、貨幣経済のみことな発展、高利貸資本の

農業浸透、複雑きわめる分業、階層分化、部分的ではあるが産業資本(マニユファグチュア)の成立などである。

貨幣経済が展開するとともに、従来の、静態的で米に依存した経済という正統的な考え方も、しだいに崩壊してきた。そして、当時の思想家は、貨幣経済の存在を受容してきただけではなく、その作用が社会秩序に如何なる影響を与えたのかなどを議論するようになった。その観点から見れば、この時代は、日本の経済思想史の中では、特に注目すべき研究対象になっている。つまり、多様な思想的な伝統に立脚していた日本の思想家が、ヨーロッパと同様の経済問題に直面していたとき、同様の質問に悩まされて、同様の答えを提出するものなのであろうかという疑問が頭に浮かんでくるのである。本稿では、当時の日本の思想家の言う「経済」概念が、近代の経済学者が使用するそれとかなり掛け離れていたにも拘わらず、彼ら

の学問的な探究が、ヨーロッパの同時代の思想家の思索とよく似た思索を導き出すこともあったということを論じることにはしたい。勿論、江戸時代に現れた経済思想を包括する体系的な分析は、全く筆者の知的な能力以上のことである。その代わりに、筆者は、その専攻する範囲から、何人かの代表的な思想家を中心に考究して、江戸時代における「市場原理」の概念、その意識が変化していった主要な流れを考察していききたい。

## 2

まず、江戸時代における「経済学」の概念自体を手短に検討してみることにする。経済学が独自の研究分野を持つようになったのは近代に入ってからであるが、J・S・ミル(John Stuart Mill)が使った意味での経済学的な考え方、すなわち生産及び分配の法則を含めた、富の性質という意味での経済学的な考え方は、すでにそれ以前の時代に、また多くの異なった社会に存在してきた。このような経済学的な考え方(議論)は、分業が十分に発達しているとか、複雑な商業制度、貨幣の広範な使用といった現象が見られる社会で発展していた。こうした社会では、政治関係や社会関係はますます経済と深く結びつくようになっていた。豊かさや地位といったものは、もはや軍事的な力や政治を行う上での慣例だけによって決定されることはなくなつて、その代わりに、物価水準や特定商品の希少性の

ような、非個人的な力に影響されるようになってきた。そのため、社会秩序や正義などの問題に関心を持つ思想家は、弥が上にも「経済」という問題により深い注意を向けなければいけなくなつてしまつた。

江戸時代の経済論争は、崩壊しつつある古い社会秩序をめぐる議論と常に不可分に絡み合つていった。勿論、論者によつて見解は様々であり、社会の階層秩序の中で論者自身がどのような位置を占めているかを反映するものとなつていた。ここで重要な点は、経済社会に変化が生じたことによつて、身分制度を維持させる経済的な基礎や富の分配が変化する原因などの問題を思想家たちが考えなければならなくなつたという点であろう。要するに、思想的な探究が経済問題の増加につれて拡大しつつあつたのである。アメリカの科学歴史家T・クーン(Thomas Kuhn)は、科学革命の構造、その推進力を説明したとき、次のように指摘している。「発見は変則性に気付くこと(中略)から始まる。次に、その変則性のある場所を広く探索することになる。そしてパラダイム理論を修正して、変則性も予測できるようになつて、この仕事は終わる。新しい種類の事実を理論の中に含めることは、その理論の単なる修正以上の意味を持つ。その修正ができ上がるまでは(中略)新しい事実、まだ科学的事実では全くないのである」<sup>2)</sup>。従つて、クーンの考えに基づいて考えてみると江戸時代には、形式的には厳格な社会・経済制度が実

質的には流動化しているという変則性こそが、政治思想・経済思想・論理思想などの各領域で、思想的な探究と革新の動きを生じさせていたと言えよう。<sup>(3)</sup>

一方、江戸時代の経済思想は、旧来からの正統的な思想がもつ幾つかの側面に疑問をはさんでいくという形で少しずつ変わりつつあった。しかし、その基本的な概念においては、この全時期を通じて、余り変わらない要素もいくつかあった。ここでは、その中から特に二点に絞って、簡単にまとめてみたい。

まず、第一にめだつたことは、「儒教への傾倒」<sup>(4)</sup>である。当時の学問といえば儒教であることは、共通認識であるが、江戸時代の儒教は、朱子学の継承から出発し、一六世紀後半から一七世紀にかけて、この朱子学は儒学界の主流をなしたと言えるが、一八世紀になると、朱子学は様々な方面から挑戦を受けることになった。荻生徂徠や新井白石といった、古典の研究や現実の政治問題への応用に力点をおく儒学者等が登場する一方で、外面的規範より個人の心の主体性を重視した、「心学ともよばれ」<sup>(5)</sup>た陽明学を信奉した学者もかなり多くなってきた。それと同時に、国学は日本固有の神道の古典の優越性を主張しはじめたし、長崎貿易に従事するオランダ商人を通じて流入してきた蘭学は、製図法、解剖学、天文学などの西洋学問を広めはじめた。こうして、朱子学の支配的な立場は江戸時代後期には幾らか弱体化したにも拘わらず、儒教の基本的な考え方は、

江戸時代の末期や明治に入ってから、経済思想のフレイムワークを形づくっていたと思われる。特に、当時の経済学の概念(経世論)に対し、儒教は無視できない影響を及ぼした。

「経済」という用語は江戸時代からすでに存在していたが、「経国済民」又は「経世済民」の略語であり、その意味は、二〇世紀の経済学、すなわち代替的な用途をもつ希少な生産資源を効率的に配分する科学としての経済学、という考え方からは掛け離れている。太宰春台(一六八〇〜一七四七)は、享保一四(一七二九)年に出版した『経済録』の序文で、その語源を次のように考察している。

凡天下国家ヲ治ルヲ経済ト云。世ヲ経シテ民ヲ済フト云義也。経ハ経綸也。(中略)経綸トハ、糸ヲ治ルヲ云。布ノ縦ヲ経ト云、横ヲ緯ト云。工女絹布ヲ織ルニ、先経ノ糸ヲ治テ、其縷ヲ条達スルヲ経ト云。(中略)綸ハ糸ヲヨル也。又経ハ経営也。(中略)宮室ヲ造営スルニ、初ニ其事ノ全体ヲツモリテ処分スルヲ、経ト云也。済ハ濟度ノ義也。ワタルトヨミ、ワタストヨム。川ヲ渡テ向ノ岸ニ至ルヲ済ト云。(中略)又救済ノ義也。スクフトヨム。人ノ苦ヲ救也。又成也ト註ス。事ノ成就スルヲ云。此数ノ義有レドモ、帰スル所ハ一致也。畢竟事ヲ治テ、其事ノ成就スル義也。<sup>(6)</sup>

言い換えれば、ヨーロッパでの経済学は、ニュートン物理学の影響下に、社会科学的な法則を求める客観的な科学として発展しはじ

めたことに対して、儒教に言う「経済」は、精神や仁政を重んじ、正義や法律、道徳などの問題と不可分に結びついた哲学的な体系であった。その点から見れば、西洋の経済学が日本に導入されつつあったとき、自由放任の経済理論より、むしろF・リリスト(Friedrich List)に代表されるドイツ歴史学派の国家中心的な経済理論やマルクス経済理論のほうが日本経済学者に見落とすことの出来ない影響を及ぼしたのは、当然のことだと思われる。

さらに、もう一つの点は、江戸時代全期を貫いた合理主義である。一般に、近代哲学の上からみれば、合理主義とは、「実践的規準として、理性的原理だけを尊重する生活態度をさしていること<sup>(7)</sup>」である。このように定義された合理主義は、一七世紀のヨーロッパにおける数学者であるR・デカルト(René Descartes)が提起した普遍的方法の理念から出発している。つまりデカルトによると、物体の運動変化は全く数量的に把握される。従って、自然のできごと全体も必然的な因果の連鎖でとらえ尽くすことができると考えられるようになったのである。

勿論、このようなヨーロッパの近代的合理主義からすれば、江戸時代における合理主義は不合理に違いない。しかし、ここではデカルト的合理主義ではなく、むしろより広い意味での、典型的な合理主義が考えられている。すなわち、「世界を一つの統一的な原理でもって説明しつくすことができる」と考える思想体系<sup>(8)</sup>を指す合理主

義である。江戸時代初期に有力であった朱子学も、いうまでもなく合理的な体系であった。ところが、こうした思弁的な合理主義は、当時つまり江戸前期の日本社会の要求に応じていた体系に過ぎなかったため、現実の変化とともに、朱子学的な合理主義も次第に崩壊しはじめた。そして、「破壊された思弁的な世界の廃墟のあとに、(中略)新しい合理主義が形成<sup>(9)</sup>」され、新たな世界像が作られるようになった。勿論、このような過程の中で合理主義の根本的な概念も変貌してきたが、しかし、ここで主張したいのは、前述してきた意味での合理的な態度が江戸時代全期を通じて認めらるうことである。

### 3

さて、本稿では、江戸時代の経済と深い関係をもつ儒学者について言及していくが、まず取り上げたいのは、経世家の先駆と目する熊沢蕃山(一六一九〜九二)である。それは、何と云っても蕃山が江戸時代の儒学者としては異例とも言うべき経歴をもち、彼はその経験を土台として独自の経世論を展開した人物であったからである<sup>(10)</sup>。その異例の経歴とは、蕃山が、岡山藩に藩政の中枢に約一〇年参画した事実である。阿部吉雄氏が指摘したように、「江戸時代の儒者は、政治的権力者の下位にあって、せいぜいその教師となるか、助言者の地位に止まるに過ぎなかった<sup>(11)</sup>」のであるが、しかし岡山藩に

における蕃山は最高権力者の一員として政治的意思決定に参画したのであり、この経験は、江戸時代の儒者として正に例外に属するものであった。

さて、熊沢蕃山が当時の社会における市場化という現象をどのように考えたのかを追求してみる場合、彼の経世論を検討することがどうしても必要であるように思われる。一般的に言えば、経世論の中核は、現状改革を企画すると現実政治に対する政策的提言である<sup>(12)</sup>。つまり、それは、現実社会の有様を、ある理想状態と想定されたものから多かれ少なかれ乖離したものとみなし、その現状を少しでも理想状態に近づけていこうとする政策案である。蕃山にあっても、彼の経世論の前提には、様々な経世策が実施されるべき場である現実社会に対するある種の認識が存するものと予想される。従って、蕃山が当時の現状をどのように認識していたのかをまず検討してみたい。

今は誰が有にもならですたる米限なし。しかれども今の勢は其すたる故に世間立事也。百姓は年貢を納め、武士は物成り取て已後は、多くすたるほど、貴賤ともによき勢となれり。此勢を変ぜずして、すならぬやうにせば、世の中ますます困窮すべし。すたりを取あげたらば、米亦下直なるべし。近年豊年故、武士も民もますます困窮す。士民つまりたればあきなひなし。工商も亦困窮す。浪人は米下直にてよきやうなれども、大身・小身詰

りたれば、合力も成がたく抱へらるゝ事も稀に、浪人するものは多し。其日過の者はよき様なれども、士農工商ともにつまりたれば、やとふ者少なし。此惣詰りは、米少し多く成たる故也<sup>(13)</sup>。

前述の文章は、当時の全社会が「惣詰り」という経済的に不安定な状態に陥っていることについて語られているものである。換言すれば、蕃山にとって、現実社会は、少なくとも経済という側面においては、全社会の「困窮」という事態に直面しているのである。では、こうした全社会的規模での「困窮」が何故発生したのか、そして、その原因について、蕃山は如何に考えていたのであろうか。

此そのより来る所余多ありといへども、其大本三あり。一には、大都・小都共に河海の通路よき地に都するときは、驕奢日々に長じてふせぎがたし。商人富て士貧しくなるものなり。二には、粟を以て諸物にかふる事次第にうすくなり、金銀錢を用ること専る時は、諸色次第に高直に成て、天下の金銀商人の手にわたり、大身・小身共に用不足するものなり。三には、当然の式なき時は、事しげく物多くなるもの也。士は禄米を金銀錢にかへて諸物をかふ。米粟下直にして諸物高直なる時は用不足。其上に、事しげく物多ときはますます貧乏困窮す。士困ずれば民にとること倍す。(中略) 士・民困窮する時は、工・商の者粟にかふべき所を失ふ。たゞ大商のみますます富有なれり<sup>(14)</sup>。

以上の二つの引用文を分析すると、社会的「困窮」の主な原因は、

まず、米価が市場メカニズムによって形成されていることであり、その米価の動向によって、武士が経済的損失を被るということである。これは、江戸時代社会において、完全な消費者である武士層がこのような市場変動に対して、コントロールする力を持ってないという事態を言い表したものであるように思われる。

次に、貨幣経済が浸透した結果、農民も市場に登場する必要があるができたということである。もっとも、「民つまりたればあきなひなし。工商も亦困窮す」とは、これまで市場における供給者であった農民は、次第に需要者になりつつあるということを意味するのであろう。要するに、蕃山によれば、市場の拡大と、その構造の変化は、社会・経済構造に見落とすことの出来ない影響を与え、さらに市場メカニズム自体が、経済的変動を起こした結果、全社会が行き詰まってしまったのである。

さて、こうした社会・経済的困窮の原因を認識した熊沢蕃山はその対策として新田開発の抑制を以って、農業生産を安定させること、さらに武士の土着化を以って、社会秩序を再生させることを提唱した。この二点について以下手短に検討してみよう。

既述したように、一七世紀の日本では、農村の貧困は全国で観察できた問題であった。この現象は一般的には、農地の不足に原因があると解釈されて、その解決策は、山林を切り開き原野を水田にするという新田開発政策に求められていた。<sup>(15)</sup>

ところが、収穫通減の法則の初歩を考えていた蕃山は、このような解決策を一貫して否定していた。蕃山はその著『集義外書』の中で次のように述べている。

是〔新田〕又不仁の君を富しめて、勢をつよくする事なれば、悪逆の根をます也。其上新田畠は、多は古地の害になるものなり。隣郷の害になるもの有。国に不毛の野山多きは、牛馬を養ふにたよりよく、薪をとるによきもの也。新田はまたこれらの害に成るものあり。<sup>(16)</sup>

または、

国に田畠ばかりにて、山林不毛の地なきは、士民共にたよりあしき物なり。野は野にてをきたるぞよく候。其上新田をひらきて、古地の田あしく成所あり、よく々かんがへ有べき事<sup>(17)</sup>に候。

上文から明らかのように、蕃山が新田開発に対する抑制的な姿勢を取る理由は、山林原野が農民生活にとって必要不可欠なものであるという考えにある。当時の日本では家畜を食用とすることがなかったため、農家は肥料源として緑肥にある程度依存していた。また、山林は、薪や狩猟、山草の源として重要であっただけでなく、雨期の地すべりや洪水を防ぐことが出来るといふ点でも重要であった。従って、新田開発による資源破壊が結果的には農村人口を不毛にする<sup>(18)</sup>と強調していた蕃山は、社会・経済システムを全体としてもっと根本的に改革する方策が必要であると提唱していた。

蕃山の考え方は、ある意味ではフランス重農主義者とよく似ている。というのは、彼も農業が富の源泉であると考えていたし、重農主義者と同様に農業への重税を軽減すべきであると提案していたからである。しかし、蕃山の考察は、ケネーのように経済体制全体の相互関係を分析する必要があるという結論には達してはいない。その代わりに、貨幣経済から撤退して、全ての事物の単位とする米・その他の五穀が価値の主要な基準であり交換手段であった社会制度に戻ることを提唱していた。

賤貨而貴徳は、人君の金銀・珠玉・珍器等を、たからとしもてあそぶるゝ妖なりといへり。宝は民のためのたからなり。民のためのたからは五穀なり。金銀銭などは、五穀を助たるものなり。五穀に次たり。(中略) 故に明王は、五穀を民のためにくたくはへさせて、万のうきらい物も、五穀にてすれば、民間に五穀みちたてあり。(中略) 五穀つかひにすれば、商の利をあみすると成かたし。故に物下直に成て、奢長ぜず。士民ともにゆたかにして、工商常の産あり。<sup>18)</sup>

そして、貨幣経済の機会を減少させて、農兵という社会秩序を再生させれば、農民は非生産的な支配階級(つまり武士)を養う必要がなくなつて、農業も繁栄すると蕃山は強調した。

むかしは農兵にて、武士民間にあり。田畠にも手伝し、山野にかりし、川沢にすなどりし、風雨にあたりて身堅固なり。(中

略) むかしは日本も農兵なりしゆへに、大方十分一の年貢なりき。農に利あれば、百姓農業にすゝむなり。<sup>19)</sup>

要するに、「徳川体制確立後八〇年にして、蕃山は体制崩壊の根本的な原因をいち早く検出していた」<sup>20)</sup>のである。熊沢蕃山の批判は、一七世紀日本に社会変動をもたらした基本的な原因を正確に照射していた。彼は、武士が農村から分離されたことが経済の貨幣化を促進したことを見事に指摘したのである。当時の思想家の中でこのことに気が付いていた者はほとんどいない。しかしながら、彼が提唱した解決策(武士土着)については、勿論当時であつてさえ、時代錯誤的であつたと思う。

## 4

一七世紀末期になって、市場取引の成長は貨幣への需要を高めたが、これに対して当時の流通制度は不十分にしか対応できていなかった。また、これに伴って財政危機という全く新しい問題が表面化していた。このような問題を巡る様々な論争は、江戸時代を通じてもっとも優れた知性の持ち主であつたとよく言われる荻生徂徠(一六六六―一七二八)と新井白石(一六五七―一七二五)との対照的な見解のうちに明確に現れている。従つて、彼らが当時の経済事態―とりわけ貨幣問題を如何に考えていたのかを手短かに検討したい。

まず、社会の市場化・貨幣経済の存在という側面から観察すれば、

徂徠が提唱していた物価論は、白石の貨幣論よりも保守的で、それほどの独創性は見られないように思える。武士の農村への復帰を提言したという点で、徂徠は熊沢蕃山と同様な意見を持っていた。

古聖人ノ人ノ法ノ大綱ハ、上下万民ヲ皆土ニ在着ケテ、其上ニ礼法ノ制度ヲ立ルコト、是治ノ大綱也。当時ハ此ニ色欠タル所ヨリ、上下困窮シ、種々ノ悪事モ出ル也。(中略) 上下皆旅宿ノ境界ナル所、聖人ノ治メニ上下万民ヲ土ニ在ツケルト、不在著ト表裏ノ相違也。<sup>(21)</sup>

しかし、一つ重要な点で徂徠は、蕃山と異なっている。それは、徂徠は交換手段としての米穀制の再建を提案することはなく、その代わりに、貨幣の使用を容認しながら、単に現物による租税や年貢を拡大することで貨幣による影響を制限しようとしたことである。

これに対して、貨幣経済の普及という問題に関しては、徂徠よりむしろ白石のほうがはるかに明快であろう。白石の考え方は、儒学の正統からかなりへだたっている。というのは、農業を富の源泉として強調するよりも、むしろ貴金属の重要性の方に優越性を与えているからである。彼は、「貴穀賤金」の原理を逆転させて、貴金属を、再生不可能であるから最も注意深く節約しなければならぬ資源として考えた。

凡金銀の天地の間に生ずる事これを人にたとふれば骨のごとく  
其余の宝貨は皆々血肉皮毛のごときなり血肉皮毛は傷れ疵つけ

ども又々生ずるものなり骨のごときは一たび折れ損じてぬけ出ぬれば二たび生ずるといふ事なし金銀は天地の骨也これを探る後には二たび生ずるの理なし。<sup>(22)</sup>

ある意味で、徂徠と白石との間に見られる経済学的なアプローチの相違は、彼らの個性と社会的地位の違いを反映するように思われる。徂徠はなによりもまず思想家であり、教育者であり、従って経済問題を道徳的な立場から観察することが出来ていたとも言えよう。他方、白石は、はるかに現実との関わりを持った政治家であり、六代・七代將軍に対する指導的な助言者として、政策形成だけではなく、現実的かつ経験的な傾向をもつ人物であった。

貴金属の供給という問題に関心を持っていた白石は、とりわけ貨幣供給量と物価との関係を具体的に分析した。元禄八(一六九五)年の貨幣改鑄以来の高いインフレ率は、物価の決定要因をめぐる活発な論争を起こした。インフレの原因を元禄貨幣の低品質に求める見解に対して、白石は厳密な貨幣数量説——つまり物価は貨幣量の変化に応じて変動するという説を取った。

凡そ物の価重く候事は貨の価軽きにより候て貨の価軽くなり候事は其数多きが故に候へば法を以て其貨を収めて其数を減じ又物の価軽く候事は貨の価重きにより候て貨の価重くなり候事は其数少きが故に候へば法を以て其貨を出して其数を増し貨と物とに軽重なきごとくに其価を平かにし候時は天下の財用ゆたか

に通じ行はれ候由相見え候。<sup>(23)</sup>

ここには、進歩的な考え方も見られるが、しかし貴金属を貨幣に用いる場合に、貨幣の量とその質の問題は、簡単に切り離すことができないという事実に対する白石の認識は欠けていた。従って、將軍家宣の顧問であった白石が自分の理論を実行に移す機会を得たとき、彼が提案した政策は、逆に貨幣問題を悪化させた。

白石の改鑄政策が失敗したために、彼のライバルである荻生徂徠が白石の貨幣数量説を批判するようになった。徂徠の観点からすれば、改鑄政策が失敗に終わったのはインフレをもたらした道德的社会的原因を把握できなかったためなのである。一七一四年に出版した『政談』の中で、徂徠は次のような批判を出した。

諸色ノ高直ニナル子細ハ、元禄ノ時金銀ニ歩ヲ入テ、金銀ノ位悪クナル故ニ高直ニナルニモ非ズ。亦金銀ノ員数フヘタル故ニ高直ニ成ニモ非ズ。元来旅宿ノ境界ニ、無制度故、世界ノ商人盛ニナルヨリ事起テ、様々ノコトヲ取雜ゼテ、次第々々ニ物ノ直段高クナリタル上ニ、元禄ニ金銀フヘタルヨリ、人々奢リ益盛ニナリ、田舎迄モ商人行渡リ、諸色ヲ用ル人益多ナル故、益高直ニ成タル也。<sup>(24)</sup>

このような徂徠の物価論は、白石の貨幣理論より保守的に見えるが、徂徠のアプローチをもっと詳しく分析してみると、物価論争に對していくつかの興味深い貢献が発見できると思われる。徂徠の説

によれば、物価は単一の原因によって決定されるのではなく、多方面から作用を受けている。白石が貨幣的な面での影響だけに焦点を絞っていたのに対して、徂徠は生産費や需給の均衡といった面の重要性にも注意を払っている。その一例として、次の文章を挙げてみよう。

実ノ金銀ハ一ツ所ニ所ヲ定ズ、方々所々ヲ旋リ行ク故、百両ノ金ハ十両ノ金ト成テ、書付ニテ見レバ十両余アレドモ、金ヲ集テ見レバ僅ニ百両ノ金成ル事、是金銀ノ姿也。故ニ金銀ノ減少シタル上、亦借貸ノ道塞ルトキハ、世界ニ金銀不足ニテ、人ノ難儀スル事也。<sup>(25)</sup>

すなわち、貨幣供給が減少したにも拘わらず、物価が上昇していくという逆説を説明するために、徂徠は、信用や流通速度という問題をも認識するようになったのである。

5

最後に、市場を万物の尺度として考えた海保青陵（一七五五～一八一七）に手短に触れておきたい。青陵は、徂徠学派に属していた太宰春台から深く影響を受けた人物であったと言われているが、彼自身は、経世論自体にはかなり懐疑的となっていた。とりわけ、慈悲深い統治者の率いる開明的な幕府が平和、豊富や繁栄などを国の隅々までもたらしてくれるという伝統的な儒学の考え方を根本的に

拒否した。青陵にとって、繁栄への鍵は、支配者の聡明さや思いやりにあるというより、むしろすべての国民の勤勉さや進取の気性のうちにあるものなのである。

具体的に言えば、青陵は、蕃山のように貨幣経済からの退去策を唱えるのと違って、それとは全く逆に、武士は商業を毛嫌いするのをやめて商人の利潤獲得活動を模倣するようにすべきであると主張していた。このような考え方は、徳川政権がはじまった最初の一世紀以後、日本の社会・社会思想が如何に進展していったのかを物語っている。

しかし、青陵の経済思想は、武士の商業活動を正当化するのに用いた論理そのものに顕著な獨創性が見られる。つまり、青陵は、石門心学のような商業論をはるかに越えて、全ての社会関係を本質的には市場取引の関係として解釈するアプローチを取った。

古ヘヨリ君臣ハ市道ナリト云也。臣ヘ知行ヲヤリテ動カス、臣ハチカラヲ君ヘウリテ米ヲトル。君ハ臣ヲカイ、臣ハ君ヘウリテ、ウリカイ也。ウリカイガヨキ也。ウリカイガアシキコトニテハナシ。<sup>(26)</sup>

こうした論法から得られる結論は、市場での交換を儒学思想で言う「理」、すなわち人間社会に秩序と調和を与える原理と同一であると見直すことである。青陵の説では、全ての社会関係は交換に基づいていて、交換は利益・利潤を得ようとする欲望に動機づけられ

ている。<sup>(27)</sup> 従って、商業と利潤獲得とは、万物の自然的な秩序を規制する重要な力と見なされるようになるのである。

凡ソ天地ノ間ニアルモノハ皆シロモノ也。シロモノハ又シロモノヲウムハ理也。田ヨリ米ヲウムハ、金ヨリ利息ヲウムトチガイタルコトナシ。山ノ材木ヲウム、海ノ魚塩ヲウム、金ヤ米ノ利息ヲウムハ天地ノ理也。<sup>(28)</sup>

要するに、青陵の著作の中では、それまで儒学思想の中だけで使われていた言葉が市場原理の合理性を説明する際に使用され、その中で元の言葉の持つ意味が変換されるようになった。そして儒学論理の美德は発生期の資本主義経済の価値観となるように変形されていった。その意味で、青陵がその死から半世紀後におきた明治維新という根本的な構造変革を発生させるための基礎を準備する役割を果たしたというのは、決して過言ではない。

日本経済思想は、伝統的に、二〇世紀の経済学と正確に対応する範疇を含んでいたわけではないが、しかし過去二世紀の社会・経済的变化に応じて、日本の思想家たちは、静態的で米に依存した経済という正統的な考え方から次第に脱して、貨幣経済を議論するようになってきた。従って、明治に入ってから、西洋の経済思想が研究されるようになったとき、それが何か全く異質で不可解なものに見えるというようなことはなかった。

注

- (1) テッサ・モリス・鈴木(藤井隆至訳)『日本の経済思想—江戸時代から現代まで—』岩波書店、一九九一年、一三頁。
- (2) トーマス・クーン(中山茂訳)『科学革命の構造』みすず書房、一九九一年、五九頁。
- (3) テッサ・モリス・鈴木、前掲書、二〇頁。
- (4) 塚谷晃弘「経済思想における日本の特性」(相良享、尾藤正英、秋山虔編『講座日本思想2 知性』) 東京大学出版会、一九八三年、三〇五頁。
- (5) 尾藤正英「陽明学」(『国史大辞典 第一四巻』) 吉川弘文館、一九九三年、三五—頁。
- (6) 太宰春台『経済録』(頼惟勤校注『日本思想大系37 徂徠学派』) 岩波書店、一九七二年、一六頁。
- (7) 伊藤勝彦「合理主義」(『ニッポニカ日本大百科全書 第九巻』) 小学館、一九八六年、六七頁。
- (8) 松浦玲「江戸後期の経済思想」(『岩波講座日本歴史13 近世3』) 岩波書店、一九六七年、一二七頁。
- (9) 師岡佑行「近世的合理主義の展開—懷徳堂の思想をめぐって—」(奈良本辰也編『近世日本思想史研究』) 河出書房、一九六五年、一二九頁。
- (10) 熊沢蕃山の経歴については、例えば宮崎道生「熊沢蕃山の研究」思文閣出版、一九九〇年・後藤陽一「熊沢蕃山の生涯と思想の

- 形成」(後藤陽一・友枝龍太郎校注『日本思想大系30 熊沢蕃山』) 岩波書店、一九七一年等参照。
- (11) 阿部吉雄「江戸時代儒者の出身と社会的地位について」、『日本中国学会報』、第三集、一九六一年、一六一頁。
- (12) 川口浩「江戸時代の経済思想—「経済主体」の生成—」勁草書房、一九九二年、二三頁。
- (13) 熊沢蕃山『大学或問』(後藤陽一・友枝龍太郎校注『日本思想大系30 熊沢蕃山』) 岩波書店、一九七一年、四一七頁。
- (14) 熊沢蕃山『集義和書』(後藤陽一・友枝龍太郎校注『日本思想大系30 熊沢蕃山』) 岩波書店、一九七一年、二四九頁。
- (15) 一七世紀初めから一八世紀にかけては、耕地の著しい拡大が見られ、全国総耕地面積は、一六〇〇年には、二〇六万五千町、一六五〇年には二三五万四千町、一七〇〇年には二八四万一千町というように推移した。(速水融・宮本又郎編『日本経済史1 経済社会の成立』) 岩波書店、一九八八年、四六頁。
- (16) 熊沢蕃山『集義外書』(正宗敦夫編『増訂蕃山全集』第二巻) 名著出版、一九七八年、一五五—一五六頁。
- (17) 同右、七—八頁。
- (18) 同右、一九一頁。
- (19) 同右、二〇一頁。
- (20) テッサ・モリス・鈴木、前掲書、三〇頁。
- (21) 荻生徂徠『政談』(吉川幸二郎・丸山真男・西田太郎・辻達也校注『日本思想大系36 荻生徂徠』) 岩波書店、一九七三年、三〇五頁。
- (22) 新井白石『本朝宝貨通用事略』(『国書刊行会編『新井白石全集』

第三卷) 国書刊行会、一九七七年、六七三頁。

(23) 新井白石『白石建議』(国書刊行会編『新井白石全集』第六卷) 国書刊行会、一九七七年、一九一〜一九二頁。

(24) 荻生徂徠、前掲書、三三三頁。

(25) 同右、三三七頁。

(26) 海保青陵『稽古談』(塚谷晃弘・蔵並省自校注『日本思想大系

44 本多利明・海保青陵』岩波書店、一九七〇年、二二二頁。

(27) テッサ・モリス・鈴木、前掲書、五六頁。

(28) 海保青陵、前掲書、二二二頁。